

(1) ウメ

〔果樹類>落葉果樹>核果類>小粒核果類>うめ〕

① 防除のポイント・注意事項

病害虫名	防除時期	摘 要
黒 星 病	生 育 期 (開花終了 ～ 5 月)	・果実への感染から発病までの潜伏期間は30日以上ある。 ・4月中旬～5月上旬の天候が低温多雨になると発生が多くなる可能性がある。 ・風通しや日照の悪い園で多発する。多発園では散布間隔を10日以内にする。
	収 穫 後 (8～9月)	・翌年の発生源になる枝病斑を減らすとともに、花枝生産をする場合はその品質向上をはかるため、収穫後から9月末までに薬剤を散布する。
かいよう病	葉芽発芽前 ま で (休 眠 期)	・常発地では休眠期防除が不可欠だが、強風を受けやすい園では防風垣や防風ネットによる防風対策が必須である。
	果実肥大期 (4月上旬～ 5月上旬)	・強風や降雹等で傷害を受けた場合は、治療効果のある抗生物質剤を速やかに散布する。 ・かいよう病の防除対策は欄外参照。
灰色かび病	生 育 期 (開花終了直後 ～4月中旬)	・開花後のガクや雄しべで発病が始まり、幼果では多くの場合、果梗周辺にやや窪んだ病斑を生じる。好適な条件が揃うと、果実全体が菌糸で覆われ落果する。 ・開花盛期から開花終期までの日数が10日以上に長引くと発生が多くなる傾向にある。
すす斑病	生 育 期 (5月下旬～6 月 上 旬)	・5、6月に雨の多い年や収穫期が遅い谷あいの園で多発しやすい。 ・ネット収穫を行う場合は、収穫開始時期を考慮して最終薬剤散布の時期を調整する。
環紋葉枯病 葉炭疽病	収 穫 後 (7～8月)	・発生前の予防散布または発生初期に薬剤散布を行う。
切り口および傷口のゆ合促進	剪定整枝時、 病患部削り取 直後、及び 病枝切除後	・切り口にトップジンMペーストを適量塗布する。
アブラムシ類	生 育 期 (4 月 ～ 5 月 中 旬)	・幼木や窒素過多で生育旺盛な樹に発生が多い。 ・展葉期から5月に高温、乾燥が続くと多発しやすい。 ・展葉直後の新梢や幼果に寄生して吸汁する。新梢に寄生すると葉は萎縮する。
ノメトガリキリガ (モモハナムシ)	開花終了直後 ～ 幼 果 期	・花蕾および幼果に貫入・食害する。
コスカシバ	休 眠 期 (落 葉 後 ～ 萌 芽 前)	・この時期にガットキラー乳剤を用いる場合、樹幹部および主枝に十分散布する。新芽の薬害を避けるため、萌芽前に散布を終える。
	幼虫発生期 (5月～10月)	・生物農薬を用いる場合は、効果を高めるため晴天時の散布は避け、曇天または少雨時に散布するのが望ましい。 ・虫糞が見られるところを中心に主幹部全体に散布する。
	成虫発生期 (5月上中旬)	・この時期は成虫の交尾阻害により密度低下をはかる性フェロモン剤を用いる。 ・ディスペンサーを枝に巻き付け固定する。効果は1シーズン限りなので毎年付け替える。 ・効果を高めるために、広範囲一斉設置と併せて防風垣の設置を行う。
ケムシ類	幼虫発生期	・ウメを食害するケムシ類としては、春季に発生するマイマイガ、オビカレハ、夏秋季に発生するモンクロシャチホコ等がある。
	[耕種的防除]	・せん定時に越冬卵塊を取り除く。 ・卵は1か所に固めて産み付けられ、若齢幼虫のうちは狭い範囲に群がる性質がある。分散前の若齢幼虫のうちに発見し、捕殺する。
ハマキムシ類 アメリカシロヒトリ	収 穫 後 (8～9月)	・害虫の早期発見に努める。
カイガラムシ類 カイガラムシ類	第1世代発生期 (4月下旬 ～5月中旬)	・ウメシロカイガラムシ、タマカタカイガラムシの防除対策は欄外参照。 ・成虫のカイガラをめぐって、産卵～幼虫ふ化時期を把握し、発生初期に散布する。

病害虫名	防除時期	摘 要
幼 虫 ウメシロ カイガラムシ	第2世代発生期 (7月中下旬)	<ul style="list-style-type: none"> ウメシロカイガラムシは幼虫発生初期および7～10日後の2回防除すると効果が高い。 休眠期防除参照。
	第3世代発生期 (8月下旬 ～9月上旬)	
ケシキスイ類 アカマダラ ケシキスイ	収 穫 前 [耕種的防除]	<ul style="list-style-type: none"> ウメ果実を食害するのはアカマダラケシキスイであり、落果後、数時間で幼虫が果実へ侵入し始める。 成虫は5月中旬～秋まで発生し、幼虫は6月上旬～8月上旬まで発生する。 園内に落ちている梅が増殖源となるため、早急に園外へ撤去する。 落下果実をなるべく地面に接触させないよう、ネット収穫では朝夕2回以上こまめに果実の回収を行う。

② かいよう病の防除

本病は果実に病斑を作り商品価値を低下させるだけでなく、開花期に花梗付近に感染したものは後に黒変して落花(落果)につながることが多い。また、感染した枝は病斑部分で亀裂を生じたり、折れたりすることがある。しかし、本病に対して卓越した効果のある防除体系は確立されていないので、次の各項目により総合的な対応を行う。

・防風垣・防風ネットの設置

風雨によってできた傷口が主な感染経路となるので、樹園地の周囲に防風垣や防風ネットを整備して、風当たりを和らげることが薬剤散布よりも重要である。なお、防風対策は、ミツバチなどの訪花昆虫の活動にも良い影響をもたらす。

・抗生物質薬剤の散布

暴風雨や降雪があった場合、天候回復後すみやかに散布する。また、常発園では4月中旬に散布すると発生抑制効果が高い。

・ボルドー剤の散布

防風対策が不十分な場合、果実肥大期の薬剤散布だけでは、十分な効果が認められない事例が多い。葉芽発芽までのボルドー剤散布によって、かいよう病の越冬菌密度を低下させることができ、果実肥大期に散布する薬剤の効果を高めることができる。

③ カイガラムシ類の防除

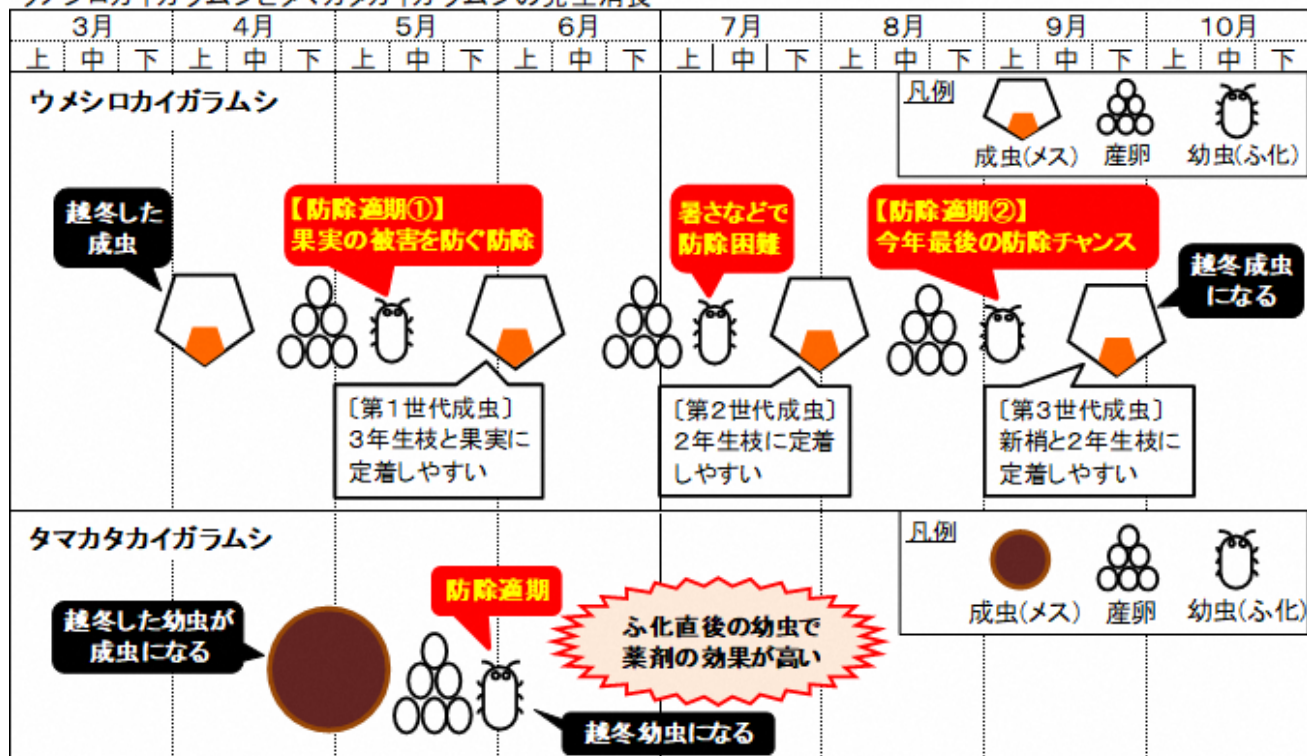
ウメシロカイガラムシ

- ・年3回発生し、5月上旬に発生する第1世代が果実にも加害する(下図)。
- ・多数の幼虫や成虫が集団でウメ樹に寄生するため、樹勢の低下やこややく病の発生原因になる。
- ・ふ化から2週間程度でカイガラを形成するため、ふ化直後に薬剤散布しないと防除効果が著しく低下する。
- ・薬剤の効果を得るためには、雌成虫のカイガラをめくって産卵時期を把握しながら、ふ化時期を正しく判断し、ふ化最盛期に適切な薬剤を用いて防除を行う。

タマカタカイガラムシ

- ・幼虫と雌成虫が寄生して吸汁加害する。多発すると落葉が早まったり、枝が枯死する恐れがある。
- ・年1回発生する。2齢幼虫で越冬し、5月下旬～6月上旬にふ化する(下図)。
- ・もっとも有効な防除時期はふ化直後の5月末頃であり、日陰部を好んで定着するため、樹の下から吹き上げて薬剤を散布すると効果が安定する(平成29年度実用化技術)。

ウメシロカイガラムシとタマカタカイガラムシの発生活長



④ スプリンクラー防除

薬剤散布の作業を省力化できるが、薬液量は手散布の約2倍必要になる。また、枝葉が繁茂した状態では枝幹への薬液の付着が劣るため、カイガラムシ等の枝幹害虫に対する防除や5月中旬以降のすす斑病防除は従来どおり手散布で行う必要がある。

作物名	薬剤名	農薬の種類	RAC	毒劇	使用時期	使用回数	使用量	使用方法	適用病害虫名/使用濃度（希釈倍率）								
									かいよう病	すす斑病	すす斑病（うめ）	灰色かび病	環紋葉枯病	黒星病	切り口及び傷口のゆ合促進	葉炭疽病	銅水和剤による薬害の軽減
うめ	ロブラル水和剤	イプロシオン水和剤	2		収穫45日前まで	2回以内	200～700g/10a	散布				1000～1500倍	1000～1500倍				
小粒核果類	オソサイト水和剤80	キャブタン水和剤	M4		収穫21日前まで	3回以内	200～700g/10a	散布		800倍				800～1000倍			
小粒核果類	トップジンM [®] -スト	チオファネートメチル [®] -スト剤	1		【A】	3回以内		塗布							原液		
小粒核果類	トップジンM水和剤	チオファネートメチル水和剤	1		収穫21日前まで	3回以内	200～700g/10a	散布					1000～1500倍	1000～1500倍		1000～1500倍	
小粒核果類	ネクスターフロアブル	イピラサラム水和剤	7		収穫前日まで	3回以内	200～700g/10a	散布						1500倍			
小粒核果類	パレード15フロアブル	ピラジフルミド水和剤	7		収穫前日まで	2回以内	200～700g/10a	散布			2000倍	2000～3000倍		2000～3000倍			
小粒核果類	フルツセイバー	ベンチピラド水和剤	7		収穫前日まで	3回以内	200～700g/10a	散布						1500～2000倍			
小粒核果類	マスタビス水和剤	シュートモスロデア水和剤	「-（生）」		収穫前日まで	-	200～700g/10a	散布	1000～2000倍								
小粒核果類	ミキ720フロアブル	イプフルフェキソ水和剤	52		収穫前日まで	3回以内	200～700g/10a	散布						2000倍			
小粒核果類(すももを除く)	スターナ水和剤	オキシニック酸水和剤	31		収穫7日前まで	3回以内	200～700g/10a	散布	1000倍								
小粒核果類(すももを除く)	ムッシュボルト-DF	銅水和剤	M1		葉芽発芽前まで	-	200～700g/10a	散布	500倍								
うめ	クレフソ	炭酸カルシウム水和剤	-			-		【Z】									200倍

使用時期：【A】 剪定整枝時、病患部削り取り直後、及び病枝切除後

使用方法：【Z】 銅水和剤に混用して散布

作物名	薬剤名	農薬の種類	RAC	毒劇	使用時期	使用回数	使用量	使用方法	適用病害虫名/使用濃度（希釈倍率）											
									アカダケシキスイ	アブラムシ類	アメリカシロトリ	ウメシロカイラムシ	カイラムシ類	カイラムシ類幼虫	ケシスイ類	ケムシ類	コスカシハ	ノコトガリキリガ	ハマキムシ類	
小粒核果類	コルト顆粒水和剤	ピリフルキナゾン水和剤	9B		収穫前日まで	3回以内	200～700 $\frac{\mu\text{g}}{\text{10a}}$	散布		2000～4000倍			2000倍							
小粒核果類	スタークル顆粒水溶剤	ジメトラン水溶剤	4A		収穫前日まで	3回以内	200～700 $\frac{\mu\text{g}}{\text{10a}}$	散布		2000倍										
小粒核果類	モベントフロアブル	スピロテトラマト水和剤	23		収穫7日前まで	3回以内	200～700 $\frac{\mu\text{g}}{\text{10a}}$	散布		2000倍			2000倍							
小粒核果類(すももを除く)	ダリアゾン水和剤34	ダリアゾン水和剤	1B	劇	収穫21日前まで	2回以内	200～700 $\frac{\mu\text{g}}{\text{10a}}$	散布		1000～1500倍	1000～1500倍									1000～1500倍
果樹類	ハイセーフ	スタイナーネマカーボカブサエ剤	「-(生)」		幼虫発生期	-	25 $\frac{\mu\text{g}}{\text{10a}}$	【Y】										2500万頭(約10g)		
果樹類	スカシバコンL	シナンセルア剤	-		成虫発生初期から終期	-	40～100本/10a	【X】			8g/100本製剤									

使用方法：【Z】 樹幹部及び主枝に散布、【Y】 虫糞が見られる所を中心に主幹部全体に散布、【X】 ディスペンサーを対象作物の枝に巻き付け設置する